

令和7年度 学内競争的資金採否一覧

令和8年3月31日

「生命環境系長裁量経費」(6/13支援室申請締切)

	件名	MSC申請者	申請額(千円)	採否	採択額(千円)	概 要
	菅平高原実験所大明神寮保存活用に係る南側フェンス整備(継続)	呉羽正昭	792	採	200	山岳科学センター菅平高原実験所は発足から90年が経過し、施設内の樹木もかなりの高木、大木に成長するとともに周辺の繁茂が進んでいる。令和6年度には裁量経費から支援をいただき伐採を実施するとともに技術職員による仮払いなどで日々環境整備に努めている。しかしながら、南側フェンス周辺の約半分のエリアは引き続き繁茂が進んでいることから技術職員等による仮払いが困難な状況となっており、隣接するラグビー日本代表合宿でも利用されるアンダーアーマー菅平サニアパークに敷地を超えて浸食する状況となっている。隣接地へ損害を与えるリスクを軽減するためフェンス周辺の伐採について申請するものである。

「生命地球科学研究群長・生命環境科学研究科長裁量経費」(6/13支援室申請締切)

	菅平高原実験所大明神寮保存活用に係る南側フェンス整備(継続)	呉羽正昭	792	採	200	山岳科学センター菅平高原実験所は発足から90年が経過し、施設内の樹木もかなりの高木、大木に成長するとともに周辺の繁茂が進んでいる。令和6年度には裁量経費から支援をいただき伐採を実施するとともに技術職員による仮払いなどで日々環境整備に努めている。しかしながら、南側フェンス周辺の約半分のエリアは引き続き繁茂が進んでいることから技術職員等による仮払いが困難な状況となっており、隣接するラグビー日本代表合宿でも利用されるアンダーアーマー菅平サニアパークに敷地を超えて浸食する状況となっている。隣接地へ損害を与えるリスクを軽減するためフェンス周辺の伐採について申請するものである。
--	--------------------------------	------	-----	---	-----	--

「学群教育用設備整備等事業」(6/13支援室申請締切)

	菅平高原実験所自然観察とラボを融合させた全国屈指の最先端野外実習のための設備更新	呉羽正昭	1,896	採	1,136	山岳科学センター菅平高原実験所は、学内利用の促進を図った結果、平成23年度に学内利用数が増加して以降、毎年安定して1100～1300人の利用があり、生命環境学群の生物学類・生物資源学類・地球学類の実習やセミナーなど、学内の学群教育に広く利用されている。また、平成25年度に「ナチュラルヒストリーに根ざした生物多様性教育拠点」として文科省の教育関係共同利用拠点に採択されて以降、学外を含めた実習利用が急増した。この野外実習の受け入れ規模は全国的にも類例がない。この拠点事業は「ナチュラルヒストリーに根ざし山岳科学教育拠点」として令和5年度から3期目に入り教育内容の広範化・高度化が行われている。こうした教育内容の広範化・高度化は、学内の学群教育にも相乗作用をもたらした。学群生向けの野外実習10科目が全国公開実習として実施され、高い意欲を持つ他大学生と刺激しあう中で活発な実習が行われている。特に40名規模の学生を受入、それぞれが実体顕微鏡を使用できる環境を整えたことで実習メニューも増え、魅力的な自然と隣接するラボを融合した最先端の野外実習が夏期のみならず冬季にも行われている。しかし、近年の実習の質・量の増加に設備の更新が追いついておらず、実習用の実体顕微鏡の劣化や故障による不調が発生しており使用することができないものが増えている。また、冬季の転倒防止のため融雪マットを設置しているが経年劣化により、凍結が防げず学生の安全が確保できない状況となっている。
	筑波実験林植物見本園におけるDX推進	呉羽正昭	2,123	採	1,400	山岳科学センター植物見本園は約250種の樹種が展示されており、生命環境学群の授業や実習・研究等に活用されている。これまで植物見本園案内図の看板や16か所のゾーンを説明する看板、種名や特徴を説明する樹名板を整備してきたが、老朽化によってその多くが破損した状態になっている。この課題を解決するためには、従来の看板や樹名板を更新することが最低限必要であるが、従来の看板を更新するだけでなく、この機会にIoTを活用した看板や樹木版を導入し、植物見本園のDX(デジタル・トランスフォーメーション)化を推進する。具体的には、看板や樹名板を植物のデータベースを連動させ、来園者がQRコードを読み込むことで発展的学習をできる機会を提供する。また、データベースへのアクセス分析することで、年間を通じて来園者の利用状況を把握する。さらにデータベースを多言語に対応することで、大学施設の国際化推進にも貢献することが期待される。

「戦略イニシアティブ(A)」

	件名	MSC申請者	申請額(千円)	採否	採択額(千円)	概 要
	R7(重点育成研究拠点)	呉羽正昭	2,700	採	2,700	山岳科学センターは全国級研究拠点を目指して、山岳生態系のITを用いた自動観察システムの基盤整備を行い、国内外の利用者の利便性を図っていく予定である。また国内だけでなく国際的にもネットワークを強化して山岳科学センターの知名度を上げていき、国際共同研究を企画して行く。また国内では屈指の山岳領域として「山理解領域」、「山管理領域」、「山活用領域」における分子生態学の拠点を形成していく。